ペット介護の社会学
――老犬老猫ホームにかかわる事例検討――

ヤマザキ動物看護大学　新島典子

【1．目的】

本研究の目的は，ペットとの真の「社会的共生」に向けたペット介護のあり方，その実現を阻む諸問題など，ペット介護を巡り飼い主が直面するリアリティとそこで果たす老犬老猫ホームの意義の検討である．番犬からペットへ，そして「伴侶」動物や「家族」と称される程に飼い主との距離を縮めてきた犬も，獣医療の進展等により長寿化し，2018 年の平均寿命は犬 14.29 歳，猫 15.32 歳 , 7 歳以上の高齢犬飼育比率は 55.7％ , 高齢猫飼育比率は 47.3%（日本ペットフード協会 , 2018）と，人以上に超高齢化が進んでいる．慢性疾患も増え，介護も長期化し，日常生活との両立や介護疲れに悩む飼い主も少なくない．単身世帯も増え，飼い主本人の入院・死亡時のペットの世話（ケア）も悩みの種である．こうした飼い主のニーズに応えるように，飼い主が世話を出来なくなった老犬などを預かる施設，いわゆる「老犬ホーム」が増えている． 他方で海外では，要介護状態のペットは，生きながらえさせるよりも安楽死させるのが飼い主の務めと考える傾向が見られる．だが，日本の飼い主や獣医師の多くは，このような対応には馴染んでおらず，国内における安楽死件数は少ない（Niijima et al, 2010）．飼育方法や獣医療の技術面では，先行する欧米の後追いで来た感があるが，ペット介護問題においては，日本人の感覚に見合った独自のペット介護や終末期ケアのあり方や意味づけの探求が必要であることが推察される．

【2．方法】

そこで，本研究ではまず，日本の高齢ペットケアの現状とその社会的背景を，既存の各種データから分析し，把握に努めた．次に，飼い主のニーズや問題を把握するべく，国内の老犬ホームに老犬を過去に預けていた，あるいは現在預けているユーザー飼い主 4 名に対し，一人当たり 30 分～ 1 時間半の半構造化面接調査を行った．さらに，老犬ホームでのペット介護や終末期ケアの実践の様子を参与観察によりデータ収集した．また，老犬ホーム職員 3 名に対し，飼い主とのかかわりについて面接調査を行った．これらの調査で収集したデータから，老犬ホームを利用する飼い主およびホーム職員双方にとっての，ペット介護をめぐる諸問題と意味を検討する．

【3．結果】

老親をホームに預ける決断が容易でないのと同様に，老犬を他所に預けることには逡巡する飼い主も多い．また，人ではなく動物であるペットに多額の介護費用を掛けるという判断の難しさ，周囲の他者からの眼差しの影響，玉石混合の老犬ホームの中から預けられるホームを探しだすこと自体も，現状では簡単なことではなかった．だがひとたび良いホームに巡り合い，職員と終末期ケアを分かち合えれば，悔いの無い看取りに繋がりやすく，職員のケアにより飼い主の喪失感も深刻化しにくいことも分かった．

【4．結論】

動物観や死生観の影響，同調圧力，そして飼い主とペットとの距離が，老犬介護における飼い主の苦悩を増す現状がみられる。また，一定基準を充たした老犬ホームの利用が , ペット介護における飼い主の苦悩を低減し，ペット介護や終末期ケアに対する新たな意味づけが可能になりうることが明らかになった．